

# 村上忠順翁顕彰会報



村上忠順翁が過ごした千巻舎

撮影 吉田悠一

## ★ 目次 ★

- 会長の言葉 P.2
- 明治草創期 忠順翁の吐息 P.3-4
- 村上家千巻舎 P.4-5
- 忠順の父 村上忠幹の歌 P.5-6
- 令和元年度活動報告 P.6
- 第15回「忠順大賞」入賞作品 P.7-8

村上忠順翁顕彰会報 第32号

編集 村上忠順翁顕彰会事務局

発行 令和3年3月31日

## コロナ禍を超えて



村上忠順翁顕彰会

会長 近藤 光良

いま世界中で新型コロナウイルスが蔓延し、人々はその威力におびえています。新型コロナウイルス流行の第三波はこれまでになく多くの感染者を発生させており、外出行為の自粛を迫られ、生活の自由、行動の自由を制限せざるを得ない状況が長く続いています。このように新型コロナウイルスの影は我々の生活に徐々に大きな影を与えてきているように感じます。

先日、私たち村上忠順翁顕彰会主催による「忠順大賞」を募集したところ、例年のように千五百首を超える作品を応募していただきました。このコロナ禍の中でこのように多くの作品を応募していただいた皆様に感謝申し上げます。顕彰会の事務局で全作品に目を通させていただきました。大半の作品は小・中学生の作品ですが、読ませていただき、例年とは違う雰囲気や作品の中に感じざるを得ませんでした。作品の多

くに新型コロナウイルスに関する内容が多く、子供たちの日常にもこの新型コロナウイルスが大きく影響していることを感じざるを得ませんでした。

当顕彰会主催の公開講座「四方樹大学」で塩村先生に解説をしていただいている忠順翁の日記「座右記」にも、忠順翁の時代安政五年（一八五八年）に日本全国に難病コレラが流行したことが書かれています。詳細は記述されていませんが、当時の国民はヨーロッパの対処法を知らされており、それを実行することにより危機を乗り越えてきたようです。私どもも新型コロナウイルスの感染を予防する「三密回避」をしっかりと実行し、一刻も早く克服する努力が必要と感じます。

ところで、皆さんは豊田の歴史博物館が令和五年度のオープンを目指し建設中であることをご存じでしょうか。場所は旧県立豊田東高校の跡地（美術館の隣接地）です。これまで度重なる町村合併で成立した豊田



左が新歴史博物館 右は豊田市美術館  
市民文化会館より矢作川方向を臨む

市を一つに束ねる意味でも、市内各地の歴史を総合的に展示できる画期的な施設になるであろうと思われれます。この新博物館で村上忠順翁の資料も収蔵され、展示される日が来るものと期待しております。

コロナ禍の時期、各種行事が軒並みに中止になってきており、心に穴が開いたような感じでした。当顕彰会も、昨年はやむなく総会の中止や会員の皆さんが楽しみにしていた女性部研修会、歴史探訪も中止しました。事務局ではこうした状況の中で、コロナ過が収束した後、より多くの、そしてかつ幅広い皆様に顕彰会活動に楽しく参加していただく取り組みを検討中です。博物館の建設に合わせ、私たち顕彰会も地域の誇りである村上忠順翁の業績をしっかりと検証し、展示物に負けない活動を展開してまいります。

まだまだ新型コロナウイルスの脅威は消えそうにはありませんが、皆さんと一緒に「三密」の活動を控えながら新たな芽吹きを目指して雪解けを待ちたいと思います。会員の皆様の忌憚のないご意見を参考にさせていただきますとともに、なお一層のご支援をお願いいたします。

# 明治草創期 忠順翁の吐息

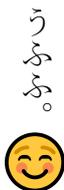
事務局 近藤 銈司

新型コロナウイルスの緊急事態宣言が三月二十一日をもって解除されました。しかし、澄み切った青空が臨めた訳ではありません。マスク着用だ・ソーシャルディスタンス確保だとか言われ、新しい常識に翻弄された一年でもありました。急変する社会についていけず、青息吐息の私であります。

変貌する明治の草創期にあつて、忠順さんは、どんな吐息を吐きながら日々を送つてみえたのか、豹変しつつ前進していった明治草創期に絞つて考察を加えてみます。

明治元（西暦一八六八）年 忠順五十七歳  
有栖川宮熾仁親王に委託された戦勝祈願文を起草。

（吐息）\*古式に則つて伊勢・熱田両社に戦勝祈願文を納めることができ、中央での活躍も出来ようかと、少々自信を持ち始めた忠順さんでした。



明治二（西暦一八六九）年 忠順五十八歳  
知立神社に「延喜式二六坐内」の標石を寄贈し建立。

\*永年の念願ここに完成。東海道の三

大社の一つとして誇りに思える。神道を糧とする私の金字塔ができた。知立神社西門に今もある。見てくれ。



明治三（西暦一八七〇）年 忠順五十九歳

八月一六日 尾州沓掛村の正福寺に改宗届けを提出。

\*古代神道の信奉者忠順ここに在りと言つたところ。

満足げにほくそ笑む。



十月十八日 権少参事日高浩蔵曰く「予て願被成候神葬祭義勝手次第可被成候」

十二月六日 日高曰く「先般御離二自葬祭ト御申ツカワシ候ヤ 答云 否 シカラバ神葬祭トアルベシ」『座右記』

\*ますます面白くなつてきた。まさに御意である。いよいよ三河の民間人として初めて神葬祭が認められた唯一の人となった。故に古式に則つた土葬も可能かな？

ふむふむ!! 愉快 愉快爆笑



明治四（西暦一八七二）年 忠順六十歳

三月八日 三河大浜騒動勃発

上総菊間藩領の大浜を舞台に起こつた神道強化策は、神仏分離の令に則り神前での念仏唱和の禁止や祝詞唱和の奨励などでありましたが、寺院合併の話や耶蘇教布教への懸念等が絡んで、真宗東本願寺の僧侶数十

人と農民千名近くが参加し、菊間藩役一人を殺害した事件。結果として寺院側斬罪一名を含む三十四名、門徒側絞罪一名を含む九名を罪人とする暴動となりました。

\*忠順翁とは無関係のように見えますが、実はこの神道教化策の最先端で奔走していたのが愛娘愛子さんの主人深見篤慶でした。深見一族は、当時街道一の本店で、三河木綿の仲買問屋として江戸に店をもち、財力も持ち合わせた豪商でした。騒動の当日、「農民が稲藁を二束ずつ持ちより、あなたの家に火をつける算段で終結しているから早く逃げなさい。」と愛子さんに忠告してくれる出入りの人も居たほど緊迫した。『史談会速記』

いくら新政府のため、神道のためとはいえ、双方誤解や曲解などの交錯した果ての事件で、残念至極!! \*心が痛む事件でした。沈黙。深いため息ばかりなり!!



明治五（西暦一八七三）年 忠順六十一歳

三月四日 伊勢神宮御守護の饞別事件に關連し、忠順・忠浄京へ護送される。（座右記）

\*未明に額田県の者許可無く忠順宅に乱入し、忠順・忠浄ら4人を縛り額田県へ連れ去つた。嫌疑は、伊勢神宮御守護のため佐々木市兵衛に饞別二円（現在高十五〜二十万円程度）の大枚を渡したのは何故か。三

月十八日「さしたる罪もなき」により忠順放免。家には三十七枚封印紙が張られ、金札一両・縮緬五尺等々盗まれています。忠浄は翌年の九月まで帰宅できませんでした。

\*なんたる狼藉!!どさくさに紛れて窃盗までですかすとは。喝ッ!!  
早速額田県庶務二文書遣ワス。

怒・怒る! カチンとなる!



明治六(西暦一八七三)年 忠順六十二歳  
七月十八日 「火葬禁止令発令」(土葬にすること)

\*古代神道を所望する私忠順が期待する時代がやって来た。

うふうふ

にやり!!



明治八(西暦一八七五)年 忠順六十四歳  
五月二十三日 「火葬禁止することを解除」の令

\*なに?一年足らずで火葬にせよというのか。コロリやお七かぜで死体がゴロゴロ積まれ、衛生的にも悪いし、それに土葬にする土地もない大江戸の現状では仕方あるまい。朝令暮改もいところだ。いくら「変化あるところ進歩あり」とは申せ、ご無体ナリ。

忠順さんは、最終的に火葬されたのでしょうか?土葬で往生されたのでしょうか?その真相を知るのは、忠順さんのお墓を建て

た息子の忠浄さんのみということになりま  
すかね。

明治の草創期は、西洋に追いつけ追い越せ  
が至上命令の時代でしたから、朝令暮改の  
法も時として発令されたようです。

村上家歴代の墓は、高岡神明宮の北隣に  
あります。神道の匂いのするお墓です。一  
度お参りしてみてください。三河で最初の神  
葬祭でお送りしたお墓ですから。



### 村上家 千巻舎(ちまきのや)

事務局 寺田 俊一

忠順の所有する沢山の書物を納めた蔵  
は明治初期に建立され、何千冊もの本を保

存したことから『千巻舎』と呼ばれたそう  
です。

実際は、本が全部で三万冊以上。内訳、  
購入したもの二万五千冊、書き写したもの  
六千冊、忠順自身が書いたもの三百七十八  
冊、想像を絶する量です。

何故これ程の本が集まったのでしょうか。  
幼い頃より父忠幹・祖父忠直から書や和歌  
を学び、四歳にして唐詩選を暗唱、七歳に  
して四書五経を読んだと言われる忠順は、  
幼くして既に書物に囲まれ、慣れ親しんで  
いたのでしよう。

更に七・八歳頃から医学を、一八歳で万  
葉集や古事記を学び、三十八歳にして国学  
者本居内遠に入門、国学の研究  
究に没頭していきます。

四十二歳、父忠幹の跡取り  
として刈谷藩の藩医となるも  
忠順は医者としては半人前、  
まだまだ勉強が足りないと思  
覚、もつと世の中のことを識  
つて、殿様や人々の役にたち  
たい。それには多くの人に学  
ばなければならぬ、だから  
こそありとあらゆる本を読む  
ことが必要でした。

お城には一日おきに登城、



千巻舎 内部

↓ 当時はこんな感じ?



豊田市文化振興課所有村上忠順物語より



豊田市文化振興課所蔵  
村上忠順物語より

片道三里(12km)は健脚でも徒歩二時間は超えま  
す。夕方お城を  
発ち、家に着く  
頃には日が暮れ  
てしまいます。  
それでも忠順は  
世のため人のた

めと、夜遅くまで本を読み努力することを惜しみませんでした。

沢山の本を読み色々な知識を得た忠順、明治維新までの十四年間に、殿様の話し相手であり、良き相談相手でもありました。殿様不在の時は、お侍にも講義をしました。

「忠順は勉強するためにこの世に生まれてきたような人」ご当主村上斎さんの言葉は、未だ私の頭から消えません。

+++++

## 忠順の父 村上忠幹の歌

中澤伸弘

幕末の安政四年の年末に、尾張の小田切春江は三河知多地方の地誌である『知多土産』を刊行した。本書は三十丁にも満たないささやかな名所図会であり、知多地方につ

いての郷土誌として今も貴重である。春江は忠近と称した画家であり、その力量を中山清雄が序文に述べてゐるが、その筆になる知多の往時の社寺や名所の図にまた本書の価値はあると言へる。この形は当時流行してゐた各地の名所図会に倣つたとは言へ、その図に尾三所縁の人物の和歌漢詩俳諧を併記してゐるところもまたゆかしい。

和歌で言へば大府の三本松に忠近の名で自詠を、成岩の常楽寺に野口道直の歌などがあるが、緒川の善導寺乗林院の図に忠順の父である村上忠幹の歌一首が添へられてゐる。

吉水のきよき緒川にひびくなり

よきを道びく寺の入相

忠幹

入相の鐘を寺の名と詠み込んで歌にしたものである。

ところで、春江はこの歌をどこから採つて来たのであらうか。忠幹にはまとまつた歌集はないし、忠幹が随分離れた知多の善導寺とどう関係してゐたかも不明である。また本書の編纂がいつ頃からなされたのか分からないが、忠幹は嘉永六年四月に亡く

なつてゐるので、刊行された時には歿後四年は経過してゐたことになる。

忠幹の歌で刊行されたものは、長澤伴雄が編んだ『類題鴨川集』四編(嘉永五年刊行)に一首あるのが最初であらう。「立秋」と題するものである。

このゆふべ

かたしく袖のすゞしきは

枕よりこそ秋はたつらめ

本書には忠幹の他に忠順の歌が十五首、忠明、忠浄、忠幹妻美志子の歌が各一首づつある。しかもその三人の歌は「棟棠園井村某が七十賀に」と題するもので忠明八歳、忠浄六歳と年齢が明記されてゐる歌と、祖母美志子の歌が共に並んでゐる。七十賀の歌としては相手を棟棠園井村某などと書くのをかしいが、この人物が何者であるかも定かではなく、またこの二人の子供と七十歳の老人がどのやうな関係であつたのかも分からない。子供らしい歌でもないことからこれは忠順の代作であり、それをまとめて送つたと考へられる。巻末の作者の姓名録では忠幹の名を「玄慧」と誤刻したので、美志子の「玄慧妻」とともに後に埋木で「玄意」と直してゐる。

また西田惟恒が編んだ『安政六年五百首』にも忠順・忠明・忠浄・小鈴など村上一族の歌とともに忠幹・美志子夫妻の歌がある。忠幹の歌は「酒のみつつ思ひける」と題するもので

さけのめば心ゆきけり

これなくば月雪花も

をかしからめや

と言ふ酒好きの思ひを述べたものであり、歿後に「酒好院信楽」と戒名をつけられたことが分かる歌である。また妻美志子（本書はみし子）の歌は「夫のみまかりてのちまたのとし卯月ばかり」と題して、忠幹の一年忌の時のものである。さうすると本書が刊行された時には忠幹の歿後六年を経過してゐたこととなる。

『安政六年五百首』は安政二年に百首が刊行されてから年々に百首（百人）を増やしてゆく計画が進められ、そのため『安政年々歌集』とも総称されるが、そこには現存者の歌を採ると言ふ方針があつた。巻末の作者姓名録にも「みし子 同刈谷 村上玄意妻」とあるので、編者はこの美志子の歌を見ればその夫が故人であることは分かつてゐたは

ずである。なほ、この忠幹の酒の歌と美志子の一年忌の歌は共に忠順が編んだ『類題和歌玉藻集』初編に各一首づつ載つてゐるのである。本書の刊行は遅れて文久になつてからのやうであるが、忠順の序文が安政六年であつて時代的に『安政六年五百首』と重なるのである。

忠順はこの一年前に編まれた『安政五年四百首』に妻三千代子・忠明・忠浄・小鈴子・八千代子・深見篤慶・年の子の歌とともに自詠をも送り、翌年更に村上前関係者の歌を増やし（忠幹・美志子・深見篤行・同富女）、故人も含めて一括して惟恒に送つたのであつて、惟恒もそれは承知した上で敢へて故人として削ることをしなかつたのである。彼は忠順と深い関係にあつたことは、このあと『文久二年八百首』まで刊行したものの、惟恒の 急逝により九百首の刊行が頓挫したこの編纂を、忠順が引き継いで、『元治元年千首』として刊行したことから言へるのである。このやうに考へると『知多土産』の忠幹の歌も忠順が送つたのではなからうか。そしてこれは父の名ではあるが忠順の代作の歌であつたのではなからうかとも思へてくるのである。

## 令和元年度活動報告

※新型コロナウイルス感染拡大防止徹底のため以下三の行事を中止しました。

○ 四月十九日 定例総会中止

総会議案書を作成し役員書の書面審議による議決

○ 七月一日 女性

部研修会中止

○ 十月二十九日

歴史探訪中止

○ 九月四日

十月二日

十一月六日

十二月四日

四方樹大学受講

者延べ八十名

＊講師

名古屋大学

大学院教授

塩村 耕先生

＊講義内容

忠順翁の『座右記』

○ 十一月二十三日

＊忠順翁命日墓参

後事務局会実施。



四方樹大学講座



第十五回「忠順大賞」入賞作品

応募総数 一五五三首

・久米翠雲先生 選評

○小学生の部

豊田市長賞

堤小 一年三組 古賀 新大

おとつとがぼくのせなかのにつてきた

おんぶバツタになつちやつた

※ねころんでいると、弟がせ中にのつてきた。「おんぶバツタ」という表現が面白い。

豊田市議会議長賞

堤小 五年四組 彦坂 侑奈

友達と毎日会える幸せを

今更気付く静かな家で

※コロナ禍で家にいる時、友達のことを強く思う。「今更気付く」下の句の表現で、侑奈さんの思いがよく分かります。

豊田市教育委員会賞

駒場小二年二組 小山 陽愛

すなあそび山をほりほり妹と

手と手をつないでえ顔トンネル

※妹と公園ですなあばトンネル作りをして遊んだ。「手と手をつないでえ顔トンネル」がとってもいいです。

中日新聞社賞

堤小 二年二組 清水 咲良

友だちと木のみあつめをしていたら

赤青いろいろビーズみたい

※公園や林で木の実を友だちとひろった。赤青、色いろといっぱいあった。「ビーズみたい」のたとえがいい。きれいだね!!

会長賞 金賞

堤小 三年三組 日橋 星姫

空中で年こししたくてジャンプする

家族みんなでも楽しい

※今はもう宇宙時代です。年こしを宇宙でやろうとする発想が面白いです。一、二、三で家族みんなが飛び上がる。楽しかったね。

会長賞 銀賞

駒場小三年一組 神谷 麻衣

会いたいよおおばあちゃん

顔を見て話せる日まで元気でいてね

※コロナ禍で施設や病院にはなかなか行けない。最初の「会いたいよ」の言葉がいきっている。おばあちゃんへの思いがよく分かる。

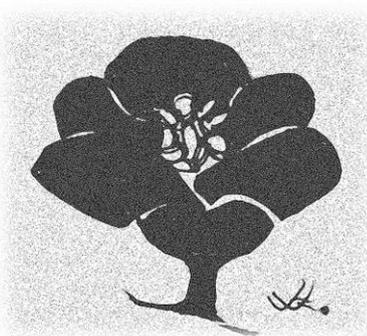
会長賞 銅賞

駒場小一年二組 川上 莉果

うれしいなバケツの水がこおったよ

あさ日があたりかがやいていたよ

※水を入れたバケツにロウバイの花を入れただね。その水がこおった。下の句から氷の中のロウバイの花のきれいさがよくかる。



○ 中学・一般の部

豊田市市長賞

前林町

酒井 雅子

海底に白き砂礫(されき)のゆるるるごと

気文な姉もわが名を忘る

※上の句によって、姉の認知症の進行が行ったり来たりする状況を上手く表現している。今は私の名さえ思いだせない。

豊田市議会議長賞

前林中三年五組

渡辺 智美

苛立ちを家族にぶつけるその日々に

素直に言えないたった一言

※誰が悪いというわけでも無いのに、イライラしてしまう。「たった一言」の一句が読み手に連想させる。上手いですね。

豊田市教育委員会賞

前林中三年六組

近藤 瑞季

うるさいな親の言葉にいらつく日

でもそんな日も幸せな日々

※親から何かと言ってくれらるることをうるさく感じる。下の句によって、瑞

季さんの人としての豊かさを感じます。

中日新聞社賞

駒場町

清水 宣子

病室の窓の青空切り裂いて

飛行雲ゆくその先見えず

※二句三句は病室の四角の窓を連想させる。上手い表現です。爆音も聞こえない高い空に飛行雲が一線を。五句は余韻がいい。

会長賞 金賞

前林中三年六組

加藤 春菜

歩くのが当たり前だと思ってた

今は歩けずわが祖母は

※上の句は、お祖母ちゃんはいつも元気と思いでいた。そして、下の句も状況だけを表現している。読み手に訴えるものがある。

会長賞 銀賞

前林中二年六組

横川 真侑

父に似て私もコーヒー好きになり

渋い顔まで似ているふたり

※親子はよく似ると言われる。私は自分でも感心する。下の句の「渋い……」は真侑

さんが父を大好きだということがよく分かる。

会長賞 銅賞

前林中二年四組

川合 夏菜

私にはいつも祖母がついている

手作りマスクあたたかいなあ

※コロナ禍であるためにマスクが何枚もいる。第五句によって、祖母に感謝、幸せを感じている夏菜さんの様子が浮かんできます。

あとがき

新型コロナウイルスに翻弄された一年、当顕彰会もその煽りを受け有料二大イベントが中止、例年イベント紀行文をそれぞれの参加者にお願ひし掲載。作者の感性・機微に触れ面白いものである。今回はそれが叶わず、記事二頁分を事務局で穴埋めすることになり、その一つを小生が拝命。事務局に入って四年目、村上忠順の記事が書けるほどの教養など持ち合わせておらず、さでどうしよう。折良く村上家『千卷舎』見学の機会を得たことで『千卷舎』を取り上げることとなりました。

(事務局 寺田)